

## 科学技術政策シンポジウム(名古屋)の意見概要

- 1 日時：平成17年10月12日(水)14:30~16:45
- 2 場所：名古屋市科学館 サイエンスホール
- 3 出席有識者議員：柘植綾夫
- 4 パネリスト：
  - ・ 松井信行 名古屋工業大学長
  - ・ 飯吉厚夫 中部大学総長
  - ・ 神崎修三 産業技術総合研究所先進製造プロセス研究部門長
  - ・ 石丸典生 株式会社デンソー特別顧問  
(愛知・名古屋地域知的クラスター創成事業本部長)
  - ・ 筒井宣政 株式会社東海メディカルプロダクツ代表取締役
- 5 参加者：115名
- 6 主な意見等

### (1) 産学連携とイノベーションについて

ともすれば、各機関で同じような研究開発活動をしがちであるが、大学、公的研究機関、公設試験研究所、民間企業が、それぞれの役割分担を踏まえ、特色ある研究開発を進めることが重要である。

産学連携の目的のために、重複した機能を持つ組織が多く、非効率である。これらを整理し、人的資源をより有効に活用できるようにすべきである。

産学連携を進めるために大学の先生が金集めに奔走するような風潮があるが、そのようなことに大学の先生の時間を使うのはむしろ非効率。大学の先生は得意な研究に集中し、その成果を企業が活用するというような役割分担が大事。

民間企業の大学への研究投資額に関して、海外の大学に対する投資額は、国内に対するものに比べ約2倍であり、この比率は近年、大きな変化はない。国内への投資額の比率を上げるよう、産学官がそれぞれの立場で努力すべきである。

地域の産学官共同研究に対して、最近、中央からの予算の割合が増えているが、結果的に地域の研究機関が中央指向となり、地域のニーズへの対応が弱くなったり、地域の特色ある研究が減ったりしている。この問題への対応策を考えてほしい。

大学で生まれたシーズを産業界のものづくりを中心としたイノベーションにつなげるためには、実証プラント等の実証試験の場が必要である。しかし、日本ではそのような施設が不十分であるし、それを実施する人材の処遇が悪い。この状況の改善が必要である。

総合科学技術会議は、大学や大企業のためのもので、中小企業から見ると、関係のない世界に感じる。企業数の約99%を占める中小企業が日本産業全体に果たす役割に対して十分に配慮した政策を立案すべきである。

日本は平安の昔から、漆の技法やからくり人形など、良いものを創ることに對して

執着する伝統があり、戦後の復興はこのものづくりDNAがあったからこそ達成できたと考えている。米国型の利益第一のものづくりではなく、しっかりと科学技術に基づいた世界に貢献するものづくりが大事であり、このようなものづくりに熱心に取り組んでいる中小企業への支援をお願いする。

## (2) 人材育成について

我が国のドクターコースにある学生への支援は非常に脆弱である。ドクターコースの学生は、学生という扱いではなく、研究者として経済的にも地位的にも独立させる必要があり、国としても支援を強化すべきである。

産学官の共同研究が、若手研究者の切磋琢磨の場となるよう、アジアからの優秀な研究者の受け入れも含めて、人件費を手当てできる枠組みを作るべきである。

## (3) 政府研究開発投資について

戦略的重点化に沿ってヒト、モノ、カネを集中投資することは、一般論として賛成だが、研究者の個人的な知的好奇心に基づいた地道な基礎研究をしっかりと大学で行える環境の維持は重要であり、それに対する十分な配慮が必要である。

資源の少ない我が国においては、ものづくりを中心とした科学技術の力によって生きてゆくことが必要であり、これなくして日本の将来はないと考えている。しかし、欧米に比べGDPに占める我が国の科学技術投資の割合が低い。これを欧米並にすべきである。

第1、2期計画では、「国の存亡に関わる科学技術」、への投資が軽んじられていた傾向があったが、第3期ではそれを是正すべしである。

## (4) その他

ペースメーカー等の高度先進医療を支える医療器具は、ほとんど欧米製品である。国民の生命を守るという安全保障上の観点から考えると、これらの医療器具の国産化に向けた施策が必要ではないか。

女性研究者を増やすことと、科学技術に対する女性の関心を向上させる施策が重要であり、第3期計画では、これをどう扱うのか。

国民の科学技術に対する理解を高めるには、科学館のように体験を通して、科学技術の面白さを伝えてゆくことが大事である。このような施策にもっと予算を厚く配分すべきである。

第3期計画では、科学者や技術者の人物像を通じて科学技術に親しみを持ってもらう施策を強化すべきである。

(以上)